

グローバル化時代への歴史教育

東洋学園大学現代経営学部 教授 木村 壮次

景気は引続き拡大し、輸出、設備投資の増加から企業の業績も好調で経営者は自信を取り戻している。短期的には、所得格差、地域間の格差という格差問題がクローズアップされているのに加え、アメリカ経済の先行き、株価の乱高下、円相場の不安定といった海外要因の影響はあるが、大騒ぎするような不況は来ないと思っている。

もちろん、長期的な点からは日本の少子・高齢化、年金、財政赤字の問題といった多くの課題はある。また、世界的には環境問題、資源問題もある。これらも楽観論者としては人間に“知恵がある限り”あまり心配していない。

経済の問題をこのように割り切ると、日本の将来のありようが最大の関心事となる。将来といえば、やはり若者の考え方、教育である。特に日本という国はいったいどのような国なのか、日本人とは何なのかという点である。これまでと同じような教育を続け、その後もメディアを通じて誤った知識が流布されるならば日本の将来は心細い。国としての一体感が失われ活気が失われる。それは経済マインドにも悪影響を与えてしまう。

最近も歴史問題を含め、いわゆる熟知顔した知識人はメディアを通して日本について自虐的な発言を繰り返すことで日本人の愚かさをあげつらっている。学生に尋ねると、現在も一様に「先生からは中学でも高校でも、ずっと、日本が悪いって教わってきた」という。自分の若い頃と全く同じである。私自身もかつて、「朝日新聞」を常に正しいと思っていた高校生で、その点では硬直していた。つまり戦後ずっと変わらず、近年ますます大きくなっている歴史教育の欠陥である。私の若い頃もいまの高校生も、近代の“日本”について、学校でその歴史を学んでいないという欠陥である。つまり、大学生の多くが近代の日本の歴史は中学レベルの知識しか持っていないのである。受験戦争に勝ち抜く彼らには、朝日新聞や教師たちの近代日本に関する、いわゆる「平和主義者、左翼的」な議論だけしか頭に残っていない。

国語の入試問題は「朝日新聞」から作成しないと同僚ないし他校の入試問題作成者から批判を受けるとも言われている。そういえば、出典には「朝日新聞」が多いけれど「産経新聞」からは出されていないようだ。高校時代から「朝日新聞」を売り込み将来の販売継続につなげているという朝日新聞の戦略・宣伝のうまさではある。

何も勉強していなかった若い頃は自虐的な論調を鵜呑みにしていた。しかし、日本のことを少し勉強した結果、いつまでもこんな自虐史観にとらわれていることは、時代を背負う若者にとっては可愛そうであるばかりでなく、誤った日本観をもってしまい、自国を愛さない根無し草の国際人がますます増えてしまう。

国際人とは、英語普及論者がいうような、英語がしゃべれれば良いというようには思っていない。日本人および日本についての発想法、伝統・文化を理解し、伝えられる人であり、海外へ出れば、その国の文化や行動様式、発想法などを理解できる人、それが、国際人だと思っている。

若い人たちには、そんな国際人になってほしい。それが“グローバル化時代の日本”に欠かせないからだ。国際人になるということは、「無国籍化」することではない。日本の文化や歴史、伝統などに関心や素養を深め、大事にして、本当にそれを知るところから、日本人としての誇りが湧いてくる。そういう誇りのない人間は、日本人としても尊敬されず、世界でも相手にされず、国際人にはなれないであろう。

国際的に活躍する芸術家、デザイナーなどは日本固有の文化、美的感覚、情緒を織り込んだ作品を世界に発信している。マンガ文化だけでなく日本固有の文化は今や世界に受け入れられているのである。世界で活躍しているサッカー、野球、アイススケートなどスポーツ選手は一律に“日本”を愛し、その重要性を日本人に伝えている。歴史教育でも頑張してほしい。